

# 類義形式「トキ」「コロ」の分析

## —時間性と空間性の観点から—

河 在必\*

(e-mail : hajp75@yahoo.co.jp)

---

### 目 次

---

1. はじめに
    1. 1 本研究の目的
    1. 2 先行研究
    1. 3 本研究の立場
    1. 4 研究資料と研究方法
  2. 分析
    2. 1 時間的な側面の違い
    2. 2 出来事間の空間的な関係の違い
    2. 3 「トキ」と「コロ」が類似してくる場合
  3. まとめと今後の課題
- 
- 

## 1. はじめに

### 1. 1 本研究の目的

現代日本語における時間を表現する形式の一つに、形式名詞<sup>1)</sup>として扱われる「トキ<sup>2)</sup>」と

---

\* 大阪大学文学研究科日本語学講座、博士後期課程2年、現代日本語文法専攻。

1) 鈴木(1972) p.203 名詞の語い的な意味が抽象化、形式化して、単独で文の部分にならず、実質的な意味をおぎなう単語とくみあわさって、文の部分となる。

2) 実例を見ると、「その時」「そのとき」、「その頃」「そのころ」の形式があり、そこで、「そのトキ」

「コロ」がある。基本的に両形式は時間的な側面における違いをみせている<sup>3)</sup>。用例1)は、個別の時間に位置づけられる人の動きとしての〈一時的なこと〉を表している。一方、用例2)は人の長期間的な活動としての〈非一時的なこと〉を表しており、文が表している時間的な側面の違いによって、「トキ」と「コロ」の使用が区別されている。

- 1) 駅に止まってもいちいち目も覚めやしなかったが、途中、一度だけうっすら起きた。/  
その時、哲生と正彦くんが小声で話していた。私の隣に哲生がいて、正彦くんは向かい側の席にいた。(予感・130)
- 2) 古い話をしても参考にはならないかも知れませんが、この間、私がいちばん苦しかったのは二十代後半の、保母をしていた頃でした。家は姑一人が少しの田畑を守っている農家で、私はそ 頃結核がなおったばかり、家の近くの保育所へ下の子供を連れて勤めていましたが、農家の女性というのは実によく働くものです。(出会い・34)

ところが、次の用例3)のように、一時的なことを表す場合にもかかわらず、「コロ」が使われている場合がある。

- 3) 「子供の意識がハッキリするまではついているつもりらしいす」勝又は鷹男の横顔を見て、「声、かけなくていいんすか」/鷹男はうなずいた。今、声をかければ、恒太郎の立場がなくなる。恒太郎が無事だということさえわかれば、それでよかった。勝又にあとを託して、鷹男は病院を出た。その頃、竹沢家では、女たちが大騒ぎをしていた。(阿・105)

用例1)と3)を比較されたい。それぞれ「トキ」と「コロ」が使われているが、共に一時的なことを表している。なぜ、3)では一時的なことを表すときに「トキ」ではなく「コロ」が使われているのだろうか。この場合、両者の違いは、「そのトキ」「そのコロ」の使われている文の表している出来事と指示されている文の表している出来事との間の空間的な関係をみることで明らかになる。

本研究では、形式名詞である「トキ」「コロ」が指示表現とくみあわさった、「そのトキ」「そのコロ」「このトキ」「このコロ」「あのトキ」「あのコロ」を対象にし、「トキ」と「コロ」の使用に、時間的な側面の違いだけでなく、出来事間の空間的な関係の違いもあることを述べる。

と「そのコロ」をそれぞれの代表形式として使うことにする。

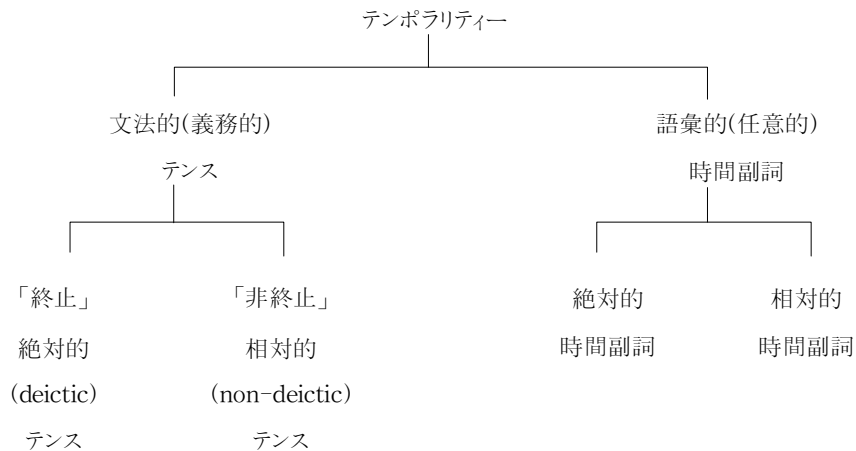
3) 用例に施した下線は発表者による。紙幅の都合により、改行部分をスラッシュ「/」で表す。

## 1. 2 先行研究

「トキ」と「コロ」が「その」「この」「あの」とくみあわさる場合について、重要な指摘をしているものとして、二つの研究を取り上げる。

### (1) 工藤真由美(1993、1995)

工藤(1993、1995)では、文レベルにおける<時間的位置づけの仕方の相違>に関わる意味・機能的カテゴリーを<テンポラリティー>と呼び、その表現形式として、文法的(形態論的)カテゴリーとしてのテンスと、語彙的なものである時間副詞の二つのタイプが存在していると記述している。そして、「何を時間的位置づけの基準軸とするか」という観点からこれらの表現形式をそれぞれ二つに分類している。



【工藤1995(p.178)】

同論文では、本研究で対象にしている形式のうち、指示表現とくみあわさった、「あのトキ」「あのコロ」と「そのトキ」「そのコロ」が、下の表のように、それぞれ絶対的時間副詞と相対的時間副詞に分類されている(網掛けは筆者による)。

絶対的=ダイクティック	相対的=非ダイクティック
いまに、今後、この後、ちかぢか、明日 (明後日)、来週、来月、来年	その後 翌日(翌々日)、翌週、翌月、翌年
今頃、目下、現在、いま(は)	<b>その時</b>

今日、今夜(今晚)、今朝、今週、今月、今年 近頃、最近、このごろ	その日(当日)、その夜、その朝、その週、その月、その年 <b>その頃</b>
いましがた、さっき、この前、この間	その前
昨日(おとつい)、昨夜、先週、先月、去年	前日、前夜、前の週、前年
<b>あの時</b> 、あの日、 <b>あの頃</b> 、当時	

【工藤(1995) : p.179】

そして、工藤はテキストタイプによって、テンス形式と時間副詞の使用に違いがあることを指摘している。

<はなしあい>では、話し手の発話行為の現存の時を基準軸として出来事が位置づけられ、テンス形式は、現在・未来－過去として対立する。また同じく、発話時を基準軸とする出来事の時間的位置づけに関わるダイクティックな時間副詞も使用される。

これに対し<かたり>では、テンス形式は現在・未来形が排除されて、過去形に限定され、また発話時を基準軸とするダイクティックな時間副詞が排除されて、出来事時を基準軸とする相対的時間副詞が基本である。【工藤(1993) : p.61】

## (2) 仁田義雄(2002)

仁田(2002)でも何を基準にしているかによって、時間表現を三つに分類し、本研究が対象にしている「あのトキ」「あのコロ」、「そのトキ」「そのコロ」「このトキ」「このコロ」について、発話時を基準にするグループと、不定時を基準にする二つのグループに分類している<sup>4)</sup>。この点に関する仁田(2002)の記述を簡略にまとめると、次のようになる<sup>5)</sup>。

4) なお三つ目のグループは、「絶対的時点の時の成分」と称されるもので、たとえば、「昭和三十三年七月、1980年、紀元4世紀頃」などがこのグループに分類される。

5) 仁田はこれらの形式を「コ(名詞)」「ソ」「ア」という三つのグループに分け、グループごとにみられる構文の特徴や用法について記述している。しかし、「トキ」と「コロ」の分析において重要な指摘ではないため、詳細については割愛する。

## 【発話時を基準にする時の成分】

発話時以前：あの時、あの頃

## 【不定時を基準にする時の成分】

その時、その頃、この時、このころ

以上、「トキ」「コロ」が「その」「この」「あの」とくみあわさる場合の分析と関わる研究を紹介した。工藤(1993、1995)と仁田(2002)はいずれも、これらとくみあわさった「トキ」「コロ」について、「何を基準軸にしているのか」という観点から二つに分類している。工藤(1993、1995)ではさらに、これらの形式の使用とテキストタイプとの関わりについても言及している。

### 1. 3 本研究の立場

本研究では、「トキ」と「コロ」の研究を行う。両形式はくみあわさる単語(句)によって、副詞として扱われたり、接続助詞として扱われたりすることがあるが、本研究では、ひとまずこれを一括して形式名詞とみなしておく。分析の前提として、先の工藤(1993)が指摘するように、テキストタイプによって時間副詞の使用に違いがあることをふまえ、テキストタイプの違いにも注目して分析をすすめる。

なお、本研究では、客観的な根拠に基づいた考察を行うために、基本的に実例に基づいて分析を行うことにするが、適宜内省による作例も用いる。

### 1. 4 研究資料と方法

本研究では、現代日本語を研究対象にするため、第二次世界大戦後(1945年以降)に発表された作品から用例を収集した。その際、テキストタイプによる違いを見るため、「会話文」と「地の文」という異なるテキストタイプを含む小説と、両者の中間的な性質をもつノンフィクションの作品を資料とした。

今回収集した用例をテキストタイプ別及び形式別に分け<sup>6)</sup>、その量的分布をみると《表1》のような分布を示す<sup>7)</sup>。

6) 「このごろ」については、「最近」の意味をもった、一語化したものとして辞書の見出しに載っていることから対象外にする

7) 1人称小説の地の文の中には、語り手の〈わたし〉が体験したことを回想して表す部分がある。このような部分のテキストタイプの分類については保留する。(「トキ」：47例、「コロ」：5例)なお、会話文には、いわゆる内的独白の例が含まれている

《表 1》 テキストタイプ及び形式別の量的分布

テキストタイプ 形式		小説(30作品)		ノンフィクション (30作品)	合計
		地の文	会話文		
その	トキ	488	198	449	1145
	コロ	61	40	249	350
この	トキ	137	15	113	265
	コロ	17	10	25	52
あの	トキ	6	206	56	268
	コロ	3	68	50	121
合計	トキ	641	419	618	1678
	コロ	81	118	324	523

《表 1》 から以下のような傾向が確認できる。

- (1) すべてのテキストタイプにおいて、「トキ」が「コロ」より多く使われている。
- (2) 「そのトキ」「そのコロ」は、量的には地の文によく用いられるが、「このトキ」「このコロ」や「あのトキ」「あのコロ」の出現数に比べると、地の文にも会話文にもよく使われている。そして、「このトキ」「このコロ」は地の文で、一方、「あのトキ」「あのコロ」は、会話文で多く用いられる。
- (3) ノンフィクションでは、地の文と同じく「そのトキ」「そのコロ」、「このトキ」「このコロ」がよく使われているだけでなく、会話文のように、「あのトキ」「あのコロ」もよく使われている。

(2)は、工藤(1993)の、〈かたり〉では、発話時を基準軸とするダイクティックな時間副詞が排除され、〈はなしあい〉では、逆にダイクティックな時間副詞が使用されるという指摘を裏づけているといえよう。

以下の分析では、次のような観点から行なっている。

- ① 「トキ」と「コロ」の使われている文が表す時間的な側面の違い
  - ・ 一時的なことか、非一時的なことか。
- ② 指示表現によって、指示される出来事と、「トキ」と「コロ」の使われている文が表す出来事との空間的關係の違い
  - ・ 同空間の出来事か、それとも別空間の出来事か。

- ③ 「トキ」と「コロ」の違いがほとんどなくなる場合
- ・どのような構文的条件のもとで、「トキ」と「コロ」の違いはほとんどなくなるのか。
- ④ ①②③の分析結果の、くみあわせる指示表現及びテキストタイプによる制限
- ・すべての指示表現の場合に共通しているか、特定のものに限られるか。
  - ・テキストタイプによる制限があるかどうか。

本研究の分析の観点の一つである時間的な側面、つまり<一時的なこと><非一時的なこと>を表す文の例として、典型的なものを下に挙げておく。

#### <一時的なこと>

- 人やものの動き・変化 : 太郎はご飯を食べた/太郎が木から落ちた/ベルが鳴った。
- 人の思考・知覚活動 : 太郎はご飯が食べたいと思った/太郎は寒気を感じた/  
汽車の汽笛が聞こえた。
- 人の態度や心理状態 : 太郎の表情はけわしかった/私は太郎の言葉がうれしかった/  
私ははっとした気持ちだった。
- 自然現象 : 稲妻がピカッと光った/涼しい風が吹いた。

#### <非一時的なこと>

- 人の長期間的な活動 : 太郎は大阪に住んでいた/太郎は阪大に通っていた/  
太郎は東京で働いていた。
- 人の特性・関係 : 私は納豆が嫌いだった/私は体力が弱かった/私は小学生だった/  
私は太郎ととなり同士だった。

## 2. 用例の分析

### 2.1 時間的な側面の違い

まず、「トキ」「コロ」が使われている文を、時間的な側面から分類した量的分布の結果を《表2》に示す。表の中の数値は用例数で、括弧内の数値は「トキ」「コロ」それぞれの全用例におけるパーセンテージである<sup>8)</sup>。

<sup>8)</sup> 判断を保留している例が、「トキ」11例、「コロ」2例がある。

《表2》時間的な側面の違いによる用例の量的分布

時間的な側面 文の種類	一時的なこと	非一時的なこと
「トキ」が使われている文	814 (96.9%)	26 (3.1%)
「コロ」が使われている文	75 (17.4%)	357 (82.6%)

《表2》の量的分布から確認できるように、基本的に「トキ」は一時的なことを表す場合に<sup>9)</sup>、「コロ」は非一時的なことを表す場合に使われる。このような「トキ」と「コロ」の使われ方は、指示表現の種類を問わず、「そのトキ」「このトキ」「あのトキ」、「そのコロ」「このコロ」「あのコロ」のいずれの形式にも共通して見られる。また、テキストタイプによる制限はない<sup>10)</sup>。このような時間的な側面における「トキ」と「コロ」の違いから、周知のごとく、「トキ」は「ある状態や動作の成立を表す一時点」を表し、「コロ」は「長い一定の期間」を表していると言えよう。以下、用例を挙げる際、「トキ」「コロ」及びくみあわさる「その」「この」「あの」はゴシック体で示し、その文内の他の部分には実線を施して示す。

- 4) 「婚約の報告を受けたのは、ここですか？」 / 「いえいえ、酒の席でした。うちはごらんのとおり零細企業ですから、忘年会や新年会なんかも淋しいものです。だから、そういうときには、事務の女の子たちに、友達や彼氏を連れておいでと言っとるんですよ。二人のめでたい話を聞いたのは、今年の新年会のときだったですからね。なあ、みっちゃん、あれは新年会だったよな？」 / 自分の机について熱心に辞書をひいているみっちゃんは、あわてて「はい、はい」と返事をした。 / 「**そ とき、指輪も見せてもらった。**ルビーでしたかな。関根さんの誕生石だ」(火・51)

9) ただし「トキ」の場合、から格をとったり、「以来」が共起したりして、非一時的なことを表す場合がある。

・「結婚された？」 / 「ええ、成人の日に、母が自分で式場まで探してきて、絶対にしなさいって…」 / 自殺する二ヶ月前に、梓がそんなことをしていたとは、久我は夢にも思っていなかった。 / 「もしかしたら**あのときから**母は死ぬ気でいたのかもしれない」 / 「まさか」(かり・412)  
・初対面の河上さんは、寡黙で無愛想のように見えたが目もと涼しく、きりりとした印象を受けた。 / 「今度の仕事は、自分が好きでやっている仕事だから、とにかく書き上げたら読んでみてください」 / と言われた。**その時以私**は『ドン・ジョバンニ』を書き終えるまで、幾度も河上家を訪ねることになった。(井・97)

10) 用例5)7)は地の文、6)8)はノンフィクションの用例である



- 5) 「そうなんです。でもそれが和賀さんの魅力なんですもの」/「それはありがたい、どうなることかと思っていたが」/二人は声を合わせて笑った。この時、卓上の電話が鳴った。佐知子が出ようとすると、/「いいです。ぼくが聞く」/和賀英良がいちはやく送受器を手を取った。(砂く上>・191)
- 6) その後、いつの間にか人が走り出てきて、そのうち救急車もバトカーも到着した。しかし、あの時、刺されて倒れたあの人を、最初に見たのは、たぶん、わたしだったろうと思う。血が、タラタラと流れ出るものではなく、ドバツ、ドバツと、ある間隔をあけてあふれ出るものなのだということも、あ 知った。(駿・118)
- 7) 二人は町の小学校の同じ教室で机を並べていたが、特に仲が好いというわけではなかった。一昨年の夏、平塚の七夕祭りの人混みの中でばったり会ってから、急に口をきくようになったのである。/裏通りの喫茶店にはいり、一時間ばかり喋って、出て来るところを、金田町の人に見られていた。その 三 宏は茅ヶ崎の自転車組立工場へ勤めながら、平塚の定時制の高等学校へ通っていた。今年卒業したところである。(事件・10)
- 8) ヒッチハイクで街を出た。市街地にいれば食う物、宿泊する場所に金がかかる。一旦、田舎に行ってしまうばどこにでも野宿ができるし、いざとなれば魚を獲って飢えをしのぐことができる。それに何をしてもとがめられることはない。自由だ。/ 、 ぼくはテントすら張らずにただ地面に横になって寝ていた。朝方寒くなるとセーターを着るのだ。日本のように夜露がないので、露天に寝てもどうということはなかった。クレタ島では海岸の砂の上に寝た。/毎朝、夜明け前に起き、薄明の海に潜った。(旅・112)
- 9) ーラジカセの件は、早川社長が推測しているような出来事だったんですか?/「そうです。あ 、 うちのなかにはしょっちゅういろんな電化製品が積んであって、母からはそれには絶対触っちゃいけないって言われてたんですが、あのラジカセの箱だけ、ちょっと離れた場所においてあったんで、これはいいのかなって思っちゃって」(理由・416)

しかし、次の10)のように一時的なことを表すにもかかわらず「コロ」が使われる場合がある。

- 10) 「叔母さん！」/「一叔母さん…」クラスメートはなあんだという顔。青ざめた顔で床に横たわる咲子の姿を、四人は呆然と見下ろした。ちょうど そ 頃、里見家では、巻

子があべ川餅を作っていた。餅を大きく引き伸ばし、口に入れようとしたらちょうどそのとき、電話がなった。(阿・120)

なぜ一時的なことを表すのに「トキ」ではなく「コロ」が使われているのだろうか。この疑問に対する答えは、出来事間の空間的な関係をみることで明らかになる<sup>11)</sup>。次の2.2では、「トキ」と「コロ」の例によって出来事間の空間的な関係の違いが見られることについて述べる。

## 2. 2 出来事間の空間的な関係の違い

2.1では、「トキ」と「コロ」の時間的な側面の違い、即ち「トキ」はその文が一時的なことを表すときに、「コロ」は非一時的なことを表すときに使われていることを確認した。そして、この使われ方には、くみあわさる指示表現及びテキストタイプによる制限がないことを述べた。

ところが、一時的なことを表すにも関わらず、「コロ」が使われる場合がある。本節では、この種の例について、出来事間の空間的な関係という観点から「トキ」の例と比較した。そのうえで、その使われ方に指示表現の種類及びテキストタイプによる制限があるかどうかについて観察する。

結論からいえば、「トキ」は同空間における複数の出来事を表すときに使われ<sup>12)</sup>、この使われ方はテキストタイプを問わず、また「そのトキ」「このトキ」「あのトキ」に共通して見られる。一方、「コロ」は複数の出来事が別空間に生じるときに使われる。このような「コロ」の使用には、テキストタイプによる制限はないと考えられるが<sup>13)</sup>、くみあわさる形式には制

11) 次のように、指示表現がある時間を指し示しつつ、文が一時的なことを表す例も見られる。このような場合、「コロ」は「だいたいの時」を表していると思われるが、今回の調査では、4例しか得られず、この用法についての考察は今後の課題にする。

・ 初江も口調をあらため、「公一のことでしょうか」/「いや、奥さんのことです」/「何でしょう…」/「今晚、うかがってよろしいでしょうか」/「どうぞ…」/「公一くんは…?」/「合宿に行きますけど、七時には帰るって言ってましたから」/「じゃあそのころうかがいます」/「お待ちしています」(冬・102)

12) ただし、複数の出来事の間因果関係がある場合には、空間的な関係はなくなる。次の例では点線の部分が原因を、実線の部分がその結果を表している。

・ 被告側が陪審を選択すること自体、つまり素人の判断をあてにすることは有罪である証拠である、なんて考える裁判官もいた。こうして陪審を望むものはなくなり、日本の陪審制は昭和十八年十五年の命で消滅することになった。その時、横浜地裁は日本で最初の陪審法廷を持つ栄光を持った。それは二階中央の特号法廷として残っていて、戦級戦犯の裁判に役立った。今は主として公安関係の裁判に使われ、演説会場になっているのである。(事件・99)

13) 今回収集した用例では、ノンフィクションで別空間を表す「このコロ」の例は見当たらなかった。しかし、ノンフィクションといっても、他の出来事時を基準軸にしている「そのコロ」の例があることから、「このコロ」を使って別空間のことを表す例がありうると考えられる。

限があって、他の出来事時を基準軸にする「そのコロ」「このコロ」に限られる。

以下、便宜的に、指示表現によって指示されている文を「A」、「トキ」「コロ」の用いられる文を「B」として言及する。用例を挙げる際、Aには点線を、Bには実線を施して示す。

「トキ」の用いられた用例(11)~(16)の場合、AとBは同空間の出来事を表しているが、「そのコロ」「このコロ」の用いられた、用例(17)~(19)の場合、AとBが表すのは別空間の出来事であって、「トキ」と「コロ」の使用に出来事間の空間的な関係の違いが表れている<sup>14)</sup>。

- 11) ギルギンを、沢木はCIAじゃないかといったが、十津川にはわからない。あのあと十津川は一度だけ、ギルギンを見かけたが、そのと、彼は車内のデッキでトランシーバーを使っていた。この列車に同乗している仲間と連絡を取っていたのだと思う。(シベ・144)
- 12) 「あの、関根さんは、うちにお勤めして、初めて雇用保険に入ったんだって言いましたよ」/「本当かい?」/「うん—いえ、はい」/「それまでは入っていなかったんだって?」/「そうでした。あたしが採用されたとき、あたし一人じゃ手続きの仕方がわかんなくて窓口の人に怒られるといけなからって、関根さんが一緒に職安へついてきてくれたんです。そ、話しましたから」(火・67)
- 13) 「友達できたら、家に遊びにきてもらってもええ?」/「そうや来てもらい来てもらい。おばあちゃん、おいしいお菓子作っとくから」/「わらびもちがええわ。私、おばあちゃんが作ってくれるお菓子、大好きやねん」/私は祖母と一緒にいられることがうれしくて、一人ではしゃいでいた。そして、このとき、この幸せはずっと続くものと思っていた。(だから・10)
- 14) 老女たちはみかんの攻勢を浴びながら、あわてふためいて自分の草履を探そうと右往左往した。ふっとその中の一人が、小さな声で念仏を唱える。するとみなも唱和をする。/「帰れ! 帰れよオ!」/念仏を唱えながら、老女たちは、一人また一人と表へ飛び出した。/ちょうど のと、ドアの外に、花束と果物の包みを抱えた卷子が立っていた。(阿・302)
- 15) 「子供の頃、アンタよく寝ぼけたのよ。あれは小学一年生の時よ、日曜日で、おじいちゃんたちお留守だからって、お父さんとお母さんと三人で昼寝してたのよ、そしたら、ア

14) なお用例(11)(14)(17)は地の文、(13)(16)(18)はノンフィクションの例である。

ンタ急にガバって起き上がって、『あ、大変だ、学校おくれるよ』—ランドセル背負ってでかけようとしたのよ / 「オレが？」 / 「お父さんたら『バカ、今三時だぞ、寝ぼけるんじゃない！』縁側のところで、こやって休ゆすって—あ、お父さん、大工のトメさんからもらった派手な浴衣着てたのよ」 / 杉男は口をはさもうとしたが、恒子はなおも上擦った声で、 / 「アンタ、まだ寝ぼけてて。『ウソだ、行かないとおくれるよ』と言うもんだから、お母さん、紋付きに着がえて、一緒に学校へ行ったのよ」(家・430)

16) 転校するとすぐ、その学校出入りの洋服屋にいて詭えるのだが、すぐその日には間に合わず、二、三日かかってしまう。あれが嫌だった。 / そうですね、学期のはじめに記念写真を撮ったが、あのとき、一人か二人は違った服を着ている子がいた。みんなが夏のセーラー服なのに、一人だけは黒っぽい冬服を着ている、といった具合である。(女・64)

17) 数日後、省司から電話がかかってきた。恒太郎は省司の家の近くの喫茶店へ出向き、せがまれるままに宿題をみてやった。 / 「ちがうよ、パパ。ダメだなあ」 / 「むずかしいんだよ、この頃のは。こういうの習ったことないからねえ」 / 「こう！」 / 省司は身を乗り出す。だが、「文句言うんなら、自分でやれ」と、恒太郎が言うと、省司はあわてて、「文句言わないから一言わない。あ、うまい」 / 「おだてにはのらないぞ」 / 「やっぱし、ママのほうかうまいや」 / なんだかんだと言い合いながらも、二人は実の親子のようにむつまじい。 / 喫茶店の外では、地味な和服にショールで顔を隠した友子が、胸をつまらせながら二人の姿を見つめていた。 / ちょうどそ、国立の家には滝子が来ていた。踏み台にのり、金槌で壁に釘を打つ。ふっと手を止めて、 / 「あ、あたしのこと笑わしてくれないかな」怪訝な顔をする勝又に、「なんかおかしいこと言って…」(阿・281)

18) しかし、身元は不明でそれ以上の事情はわからない。とりあえず、殺しということも考慮に入れて、医務院で司法解剖をすることになった。 / 死因は溺死であったが、血液の化学的成分を分析すると、淡水による溺死のデータが得られた。海水で溺死すると、海水中の塩分が血液に吸収されてナトリウム、クロールなどが著明に増加するが、本件では逆に血液は水で薄められ、血中塩分は減少していた。つまり川などで溺れた後、東京湾に流れついたと考えるべきであった。 / そ、ろ、女の身元も判明した。夫婦げんかの末、夫に殴る蹴るの暴行を受け、彼女は死んでやると一言言い残して、夜半に家を飛び出したという。(死体・94)

19) 「どうしてああ熱心なんでしょうね。あんまり金になりそうもない事件ですが」 / と野口判事

補は言った。/「金にならなくても、マスコミに乗りそうな事件をやれ、これは弁護士の第一課だ。きみ達も将来転向する時の用意に、これくらいは心得ておいた方がいい」/谷本判事の言葉には皮肉な調子があった。矢野判事補は首をすくめた。 / の頃、菊地弁護士はバス通りの一品料理屋の二階で、花井武志といっしょに、カレーライスを食べていた。 / 午前の法廷が終って、廊下に出たところで、菊地は三人の新聞記者に囲まれた。(事件・238)

今回収集した用例の中では見当たらなかったが、会話文においても、「コロ」の使用によって、別空間のことを表すことは可能であろう。

20) 「昨日、日本代表の試合あったらう？ すごかったよなあ」 「俺見てないんだ。そ 病院に行ってたんだよ。 急にお腹が痛くなってさ」(作例)

21) 「山田兄弟について確認できたことは？」 「兄慶介は午後3時ごろ、大阪駅から東京に向かう新幹線に乗りました。 弟大介は伊丹空港にいました。」(作例)

このような「トキ」と「コロ」の特徴は、両形式を言い換えることで確認することができる。以下の22)23)の「トキ」と「コロ」を言い換えてみよう。すると、前者は別の場面の出来事に、後者は同場面の出来事になってしまう。

22) クズル・オワに露営していた昨日の午後三時ころ、ギョヴェンにさされそうになった子ウシがチャドルのまえを気がくったようにはりまわっていた。 数頭の子ウシが競走でもするかのように全力疾走でかけてきては急にとまり、また逆の方向へはりだすということをくりかえしていた。 ときどき、虫をさけるため空中にとびあがったりする。 / そ と 、ファトマナもハティジェもヒツジの搾乳にいそがしくたちはたらいていた。 ⇒<そのころ>

(遊牧・329)

23) 死体解剖を行なった。 そ 、女の身元が分かった。 (用例18からの作例)  
⇒<その時>

このように、他の出来事時を基準軸にしている「そのコロ」「このコロ」に、別空間のことを表す使われ方があることを述べた。しかし、この使われ方は、発話時を基準軸にしている「あのコロ」にはない。

24) しかし、さかえフラワーロードの有吉房雄は、ヴァンダール千住北ニューシティ建設当

時、確かに石田直澄とばったり出会い、前記のようなやりとりを交わしたと主張して譲らない。/「そりゃあんた、今さら家族や本人が本当のことを言うわけがないやね。前々からあのマンションを欲しがってましたなんて、みっともなくてさ。本当のことはね、判る人間にしか判らないものなんだよ。だけど、誰がなんて言ったって、あたしはあ 石田さんに会ったんだからね。これは事実だからさ」(理由・333)

以上、2.1の時間的な側面の違いに加えて、2.2では、「トキ」と「コロ」の用例に見られた出来事間の空間的な関係の違いについて述べた。しかし、「トキ」と「コロ」が常に異なった使われ方をしているわけではない。ある構文的な条件のもとでは、「トキ」と「コロ」の間の違いがほとんどなくなる場合がある。次の2.3ではこの点について述べたいと思う。

### 2.3 「トキ」と「コロ」が類似してくる場合

2.1と2.2では、「トキ」と「コロ」の使われ方には、時間的な側面の違いと出来事間の空間的な関係の違いがあることを述べた。しかし、構文的な条件や文の表す内容によって、両形式の間に違いがほとんどなくなる場合がある。本節ではこの点について考察した結果を述べる。

次のような場合、「トキ」と「コロ」の違いがほとんどなくなり、両形式を言い換えることができる<sup>15)</sup>。

- (1) 「そのトキ」「このトキ」「そのコロ」「このコロ」が「ーには」の形をとり、述語が「シテイタ」「シテイル」の形をとっている。
- (2) 「そのトキ」「このトキ」「そのコロ」「このコロ」がはだかの形か「ーは」の形で、「すでに」「もう」といった副詞が共起して、述語が「シテイタ」「シテイル」の形をとっている。
- (3) (1)か(2)の構文的な条件のもとで、「トキ」「コロ」が使われている文が「ある時点以前に成立したことが持続していること」を表している。

25) また別の事例であるが、選挙中運動員が通りがかりの酔っ払いと口論けんかになり、暴行を加えて死なせてしまった。これが報道されては落選すると、成り行きを心配した市議員候補の顔役は、知り合いの医師に頼み、脳出血、病死というニセの死亡診断書を作成してもらい密葬した。/選挙に当選したが後日、殺された身内が警察へ通報したため事件は発覚した。しかし、そ と には、遺体は火葬されて明確な証拠はなく

15) なお、「あのトキ」「あのコロ」が、このような条件で用いられている例はほとんど得られなかった(「あのトキ」：1例、「あのコロ」：用例なし)。内省では「あのトキ」「あのコロ」の場合も同様であると思われるが、この点に関する検証は今後の課題にする。

なっていた。綿密な捜査の結果、間違いなく殺しであることがわかった。(死体・119)

26) 十数年前、支店長と交際が始まる直前まで、彼女は年下の男と交際があった。一ヵ月くらいの間、彼女はこれらの二人の男性と関係をもっていたのである。このオーバーラップした一ヵ月の間に、彼女は若い男と別れて支店長を選んだが、そとすでに彼女は身ごもっていたのである。/妻以外の女との出会いで、無精子症の自分も子宝に恵まれたことを、この上なく喜んだ支店長は、子を溺愛した。(死体・48)

27) 選挙に当選したが後日、殺された身内が警察へ通報したため事件は発覚した。しかし、このときは、遺体は火葬されて明確な証拠はなくなっていた。(用例25からの作例)

28) 何これ…？わたしは啞然とした。/うちの子達は、いつもの生活空間で撮影する時でさえ、怯えて時間がかかるのに、こんなに部屋の中の様子を変えられ、そのうえ、フラッシュなんかたかかれたら、とんでもなくパニックする、と思ったからである。こういうことだと知っていたら、うちの猫には無理だと言って、お断りしていただろう。/わたしの顔は、曇った…というより、一気に不機嫌になった。/案の定、気が小さく、臆病で、異常に人見知りなオサムは、怯えて、リビングから一番遠い、夫の部屋のベッドの下にもぐり込んでしまった。こうなったら、引っぱり出すのだって、容易なことではない。/どういう撮影なのか、ちゃんと確認しなかったわたしも悪いが、はもう、まわりのみんなと、この撮影自体に否定的な気分になっていた。(駿・124)

29) 露营地での設営がおわると、ムスタファはウマでクル・チェシメへひきかえていった。馬群の一頭がたりない、という。どうも、クル・チェシメにその一頭がのこったらしい。夕方おそく、ムスタファはクル・チェシメでみつけたウマを一頭つれ、アク・ビュクの露营地にかえてきた。そのには、夕闇があたりをすっかりつんでいた。(遊牧・173)

30) 「ジュンコ先生、マリカになにしたの？」/子どもの人格であるペインは、はっきりした大きな声でそう言った。/「マリカはなにしてる？」/私はどきどきしながらたずねた。/「後ろで寝てる。」/「もう出てこないの？」/「もう寝てるの。すごく悲しいみたい。あの人たちの話がでたの？」/ペインとはいちばんよく話した。ペインの記憶はいちばん痛々しかった。あの人たち、とは常に、マリカのろくでもない両親のことだった。/「大丈夫、あの人はもういないの。」/私は言った。/「マリカはこわいのよ。」/ペインは言った。/「こわいことはみんな私が代わってあげるって、言ってるのに」/ペインはその はもう落ちついていたが、昔はこわくなると暴れてものを壊したり、自分の体を傷つけようとした。そ

の度に入院して、沢山の薬を飲み、外出が許されないつらい治療をした。(マ・17)

31) 約三時間ほどかけて、やっと山頂にたどり着いた。このころには、日も暮れていて、周りの空気は冷えこんでいた。(作例)

32) 2年間の浪人生活を経て、僕は大学に合格した。こ すでに彼女は別の男と結婚し、一児の母となっていた。(作例)

### 3. まとめと今後の課題

以上、「その」「この」「あの」とくみあわさる場合を対象にして、時間的な側面の違い(2.1)と出来事間の空間的な関係の観点(2.2)から「トキ」「コロ」の違いについて述べた。そして、両形式の違いがほとんどなくなる場合について述べた(2.3)。その内容をまとめると、次のようになる。

#### (1) 時間的な側面の違い

- ・「トキ」は基本的に一時的なことを表す場合に使われる。一方、「コロ」は非一時的なことを表すときに使われる。このような使われ方には、指示表現の種類及びテキストタイプによる制限はない。しかし、「コロ」が使われているにも関わらず、一時的なことを表す場合がある。この場合、「トキ」と「コロ」の使用によって、(2)の出来事間の空間的な関係の違いが表される。

#### (2) 出来事間の空間的な関係の違い

- ・「トキ」は複数の出来事が同空間に成立する場合に使われる。一方、「コロ」は複数の出来事が別空間にある場合に使われる。このような使われ方には、「トキ」の場合、指示表現の種類及びテキストタイプによる制限はない。しかし、「コロ」の場合、テキストタイプによる制限はないが、くみあわさる指示表現には制限があり、他の出来事時を基準軸にして用いられる「そのコロ」「このコロ」に限られる。

#### (3) 「トキ」と「コロ」が類似してくる場合

- ・述語の形式が「シテイタ」「シテイル」で、「そのトキ」「このトキ」、「そのコロ」「このコロ」が「ーには」の形をとったり、はだかの形か「ーは」の形をとって、「もう」「すでに」と共起したりする場合には、文が「ある時点以前に成立したことが持続していること」を表すようになる。この場合、「トキ」「コロ」がそ



の「ある時点」を指し示し、両形式には違いがほとんどなくなる。

(1)と(2)の結果から、「コロ」の使用を、次のように考えられる。まず、基本的な「そのコロ」「このコロ」の使用をみると、「そのコロ」「このコロ」は、非一時的なことを表す際に使われ、一時的なことを表している他の出来事に対して背景的なことを表す。この場合、二つの出来事間の時空間的な関係は、時間的には重なりがあり、同時的な関係にある。

しかし、空間的には同じ空間の関係ではない。このような出来事間の時空間の関係は、「そのコロ」「このコロ」の使われる文の表すことが、一時的なことを表している場合でも同様に考えることができる。つまり、「そのコロ」「このコロ」の使われる文の表すことは他の出来事に対して、時間的には同時的な関係になるが、空間的には別空間の関係にある出来事を表していると考えられる。

今後の課題としては、「トキ」「コロ」が使われている時間的従属複文における分析をする必要があると思われる。「トキ」の使われている従属複文の研究には、寺村(1983)、言語学研究会(1989)、工藤(1995)などがある。このうち、「コロ」についての記述は、工藤(1995)に限られており、「トキ」と「コロ」は<時期限定の明確さ>で違いがあると記述している。しかし、多くの場合、「トキ」を「コロ」に言いかえにくく、そのときの制約の条件について調べる必要があると思われる。

## 【参考文献】

- 奥田靖雄(1994)「動詞(その2)」『教育国語』2-12:27-42. むぎ書房.  
奥田靖雄(1996)「文のこと—その分類をめぐって—」『教育国語』2-22:2-14. むぎ書房.  
工藤真由美(1993)「小説の地の文のテンポラリティー」『ことばの科学6』19-65.東京:むぎ書房.  
工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』東京:ひつじ書房.  
工藤真由美(2002)「現象と本質—方言の文法と標準語の文法—」『日本語文法』2-2:46-61.くろしお出版.  
言語学研究会・構文論グループ(1989)「接続詞「とき」によってむすばれる、時間的なつきそい・あわせ文」『ことばの科学6』233-266.東京:むぎ書房.  
鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』東京:むぎ書房.  
寺村秀夫(1983)「時間的限定の意味と文法的機能」『副用語の研究』233-266.東京:明治書院  
仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』東京:くろしお出版.

## 【用例出典】

(本文に挙げた用例の出展だけをあげる。なお、本文では下線を引いた部分で表している。)

- 上野正彦(2001)『死体は語る』文芸春秋 大石静(1998)『駿台荘物語』文芸春秋 大岡昇平(1980)『事件』新潮社 大平光代(2003)『だから、あなたも生きぬいて』講談社文庫  
西村京太郎(1996)『シベリア鉄道殺人事件』講談社文庫 野田知佑(1999)『旅へ新・放浪記1』文芸春秋 松原正毅(2004)『遊牧の世界』平凡社 松本清張(1973)『砂の器<上>』新潮社 宮尾登美子(1982)『もう一つの出会い』新潮社 宮部みゆき(1998)『火車』新潮社 宮部みゆき(2004)『理由』新潮社 向田邦子(1999)『阿修羅のごとく』文芸春秋 向田邦子(2000)『家族熱』文芸春秋 向田邦子(1998)『冬の運動会』文芸春秋 向田邦子(1985)『女の人差し指』文芸春秋 吉本ばなな(1991)『哀しい予感』角川書店

## 要 旨

現代日本語の時間表現には形式名詞として扱われる「トキ」「コロ」がある。一般的には、「トキ」は「時間の中の一点」を表し、「コロ」は「だいたいの時」「およその時」または「長い一定の点」を表すとされていて、両形式の間には時間的な側面に違いがあるといわれている。しかし、両形式の間には時間的な違いだけでなく、出来事間の空間的な関係の違いもみられる。

本研究では、「トキ」と「コロ」が指示表現である「その」「この」「あの」とくみあわさった形式を対象にして、「トキ」と「コロ」の使用に、時間的な側面の違いだけでなく、出来事間の空間的な関係の違いもあることを明らかにする。

基本的に、「トキ」は、個別の時間に位置づけられる運動(動作、変化)、出来事としての<一時的なこと>を表すときに使われる。一方、「コロ」は反復習慣的なこと、あるいは、長期間的な活動としての<非一時的なこと>を表すときに使われる。このような違いから、「トキ」と「コロ」の間には、時間的な側面の違いがあると指摘されている。

しかし、「コロ」が<一時的なこと>を表すときに使われる場合もある。この場合、「トキ」と「コロ」の使用には、指示表現で指示される他の出来事との空間的な関係の違いがみられる。つまり、「トキ」が使われる文で表される<一時的なこと>は、指示される文で表される他の<一時的なこと>と同じ空間の関係にある。一方、「コロ」が使われる文で表される<一時的なこと>は、指示される文で表される他の<一時的なこと>と別空間の関係にある。

キーワード； 形式名詞、類義形式、絶対的時間副詞、相対的時間副詞

투 고 : 2008. 8. 31

1차 심사 : 2008. 9. 12

2차 심사 : 2008. 9. 27